

基地の町に生きた「バニーさん」たち

— 童心に刻まれた記憶を紙芝居に —

ノンフィクション作家

三山 喬

西武池袋線の急行で池袋駅から約四十分。稲荷山公園駅に着く手前の車窓の両側には、航空百衛隊狭山基地の広大な敷地が続いている。埼玉県狭山市と入間市にまたがる一帯は、一九三八（昭和十三）年に陸軍航空士官学校として軍事施設となり、敗戦後は米軍ジョンソン空軍基地として使用された（七八年に全面返還）。

稲荷山公園駅を降り立って線路沿いを前方に少し行くと、二、三分で狭山市立博物館に着く。朝霞市の市民有志による「基地跡地の歴史勉強会」の一行は二〇一二年、この博物館で開かれた企画展「ジョンソン基地とハイドパーク展」を見学した（ハイドパークはジョンソン基地内の将校向け居住区の名称）。

朝霞市と同じように戦後、米軍基地の街。だった狭

山市では、あの時代をどのように郷土史に位置づけているのか——。勉強会の面々は、朝霞市の返還未利用地に基地関係史の展示コーナーを新設するという市の構想を前提に、市民自らの手で史料や証言を集めようとしていた。〆ふるさとが基地の街だったところ〆というデリケートな面もあるこのテーマを、どのような角度で扱うべきなのか。一行は似た歴史を持つ自治体の先行事例を学ぶために、この博物館を訪れたのだった。

フエンスの向こうのアメリカ

このときの見学会を記録した勉強会の「会報」には、

展示室中央に1/150スケールの手作りジオラマがあり、その周囲に地元の高齢者数十人から聞き取った証言を展示した館内の様子を記している。「博物館の方、ボランティアの方との意見交換（主なものの抜粋）」という小見出しに続く文章では、こんなやり取りが紹介されている。

Q（今回の特別展を）このテーマにしたきっかけは。
A 近現代も歴史であり、博物館のある場所の歴史を知ること重要。ただ基地単独で扱いつらい部分があり、「アメリカ文化に触れた頃」という副題を付けた。

（略）

Q 歴史の負の部分はどう表現したのか。
A 興味ある部分ではあるが、冊子（展覧会のパンフレット）として取りまとめた良いのか迷った。話したくないという方も多く、それを記録することは胸が痛い。冊子には積極的に（負の部分は）盛り込んでいない。

実際、このときのパンフレットを見ると、その表紙には手作りのケーキを持つ金髪碧眼の母親と芝刈り機

を引く半ズボンの少年、一九五〇年代の米国製家電製品や丸みを帯びた「アメ車」などがポップ・アート風にデザインされ、いかにも当時の日本人が憧れた「フエンスの向こうのアメリカ」のイメージが描かれている。収録された証言も、物資豊かな将校クラブや下士官クラブで働いた体験、米軍家族と親しく交際した思い出などを懐かしく回想する談話がほとんどだ。

前記のQ&Aにあるような、暗部に触れないようにした配慮〆に関しては必ずしも正確ではないようで、当時学芸員だった上田知佐子（現・市教委職員）はこう説明する。

「私自身が聞き取りをした範囲では、特段証言を嫌がったり、負の部分強調して語ったりする方には出会いませんでした。ほとんどの方はむしろ、あの時代へのノスタルジーを楽しそうに語ってくれました」

ごく一部、「自分の知り合いで（何らかのトラブルで）米兵に追い回され、発砲された人がいる」という伝聞を口にしたたり、「町の一軒家を借りて住む〆オンリーさん〆がいた」といった話をしたりする人もいたが、総じて人々の語り口は明るく穏やかなものだったという。